

フロンティア・アドベンチャー事業に関する評価研究

——参加者に関わる評価を中心に——

井 村 仁・小 畠 哲・寄 金 義 紀
飯 田 稔・吉 田 章・橘 直 隆

An evaluative research of Frontier Adventure Project

——Evaluation of effects on participants——

Hitoshi IMURA, Satoshi KOBATA, Yoshinori YORIKANE, Minoru IIDA,
Akira YOSHIDA and Naotaka TACHIBANA

The purpose of this study was to assess Frontier Adventure Project (FAP) regarding the effects on participants. Data were collected from 283 males and females from 5th to 10th graders who participated in one of 5 FAP and 249 their parents.

The evaluation scales for participants, Counselor Image Scale, Group Atmosphere Scale, and Camp Program Evaluation Scale were administered during camp. Parental Camp Attitude Questionnaire was mailed out to their parents at a month after camp. To measure self-concept, the Self-Enhancement Scale by Kajita was administered in Pre (before camp), Post 1 (after camp) and Post 2 (a month after camp) design.

The following results were obtained.

1. The images of counselor that participants had were cheerful and humorous man like a friend.
2. Good group atmosphere related to improving in overall self-concept.
3. Parental main expectations of FAP effects were social development of child (for example, making friends and living with peers) and understanding of and appreciation for the natural world.
4. The participants who decided to attend FAP by themselves improved overall self-concept more than those who did not by themselves.
5. Participants in FAP showed significantly positive change in the self-concept category of achievement motivation and self-effort.

Key words : Frontier adventure, Evaluative research, Self-concept, Camp effects

はじめに

文部省では、昭和63年度より「地方公共団体が青少年の豊かでたくましい心と体をはぐくむために、自然環境の下で長期にわたる自然体験活動を実施する事業を推進する」ことを目的とした、児

童生徒健康増進特別事業補助金(自然生活へのチャレンジ推進事業)の交付を始めた。この事業は、一般にフロンティア・アドベンチャー事業と呼ばれ、地方公共団体、青少年団体、国公立青少年教育施設が相協力し、地域の教育力を活用して、豊

かな自然環境の中で、青少年が長期にわたって自給自足的な生活を体験する機会を提供する事業であり、従来、青少年団体や国立少年自然の家等の一部において実施されていた先導的な事業を全国的な観点から取り上げ、その広範な普及を図ろうとするものである。この事業の特徴は、1) 異年齢の少年50人でグループを形成する(小学校高学年児童から高等学校生徒まで)、2) 山奥や無人島などで自然生活原体験を行う、3) 期間は10泊11日を原則とする、ことにある¹⁷⁾。

この事業は初年度から、全国各地で大きな反響を呼び、今までの自然生活体験学習で問題になっていた特色のないキャンプ・プログラム、粗悪な自然環境、指導者不足などの点が見直されながら、普及がなされている。

フロンティア・アドベンチャー事業に関する研究報告は少ないが、運営面に関する研究がなされる^{1,9,23)}一方、参加者への効果に関しても各事業体毎に発表会や報告書作りを行いながら評価がなされたり、岩田¹⁰⁾、宮下¹⁶⁾、井村⁸⁾によっても報告されている。

岩田¹⁰⁾は、岡山県教育委員会主催のフロンティア・アドベンチャー事業に参加した小・中・高校生38名を対象に、不安、自己概念及びキャンプに対する態度の変化について検討した。その結果、キャンプ後半に不安が低下し、それに伴って自己概念の向上がみられ、この変動は男子よりも女子に、中・高校生よりも小学生に顕著にみられた。また、自然環境に関する知的興味やキャンプ生活での技術(ロープワーク、クラフトなど)に対する興味は増大し、テントでの生活・野外炊事などに対する興味は減退する傾向がみられたと報告している。

宮下¹⁶⁾は、千葉県教育委員会主催のフロンティア・アドベンチャー事業に参加した小・中・高校生48名の性格の変化をみるために、生活指導診断検査(DTSG検査)を事前・事後実施した。その結果、DTSG検査の9項目中7項目に有意な向上がみられた。特に、身の回りの整理・整頓をする、時間を守るといった「基本的生活習慣」、自分で考え実行するといった「自主性」、生活をよりよくしようと工夫する「創意工夫」、人の気持ちや立場を理解し、自分と異なる意見を尊重するといった「寛容・協力性」、自分の利害にとらわれず正を愛し不正を憎み、誘惑に負けないで行動する「公正」等

の項目に顕著な変化がみられたと報告している。

井村⁸⁾は、神奈川県及び神奈川県青少年協会主催のフロンティア・アドベンチャー事業に参加した小・中・高校生50名の自己概念と集団凝集性の変化について検討した。その結果、キャンプ直後及び半月後にも達成動機を中心とした自己概念の向上がみられ、この傾向は男子により顕著であった。また、年齢幅の大きい異年齢集団では、班内の凝集性は高まらない傾向にあると報告している。

この他、フロンティア・アドベンチャー以外の冒険的要素を含むキャンプ経験が参加者に及ぼす影響については、井村^{8,9)}が小中学生と中高生をそれぞれ対象に、キャンプ前後の自己概念を測定し、いずれも自己概念の向上がみられたと報告している。

このように、冒険教育が参加者に及ぼす効果に関する研究の多くは、自己理論の枠組みの中で展開されており、特に自己概念の向上が中心となっている。キャンプ生活の中で、次々に取り組んできた課題をどの程度成功裏に達成できたかという成功・失敗経験と、その課題達成を通じてどの程度周囲の人から評価されてきたかという承認・否認経験の積み重ねによって自己概念の向上がもたらせるという前提にたっている。

またキャンプは、小集団生活を通じてキャンパーの社会性を育成することを目標としており、集団過程やリーダーシップに関して多くの研究が行われ、その成果が示されている。例えば、11~12歳のキャンパーの集団内における相互作用過程を明らかにした Sherif & Sherif¹⁹⁾の実験では、相互依存的な活動によって目標達成に成功することが、集団の凝集性の規定要因であることを報告している。冒険教育では、危機的な場面を意図的に設定し、その課題を集団で達成していくことによって、成員間の相互作用を促進させ、社会性の育成を図っている。

フロンティア・アドベンチャー事業は、今まで行われてきた多くのキャンプと異なり、冒険的活動を強調した10泊という長期キャンプを基本原則としていることから、参加者は、事業を体験することにより、教育キャンプが目標とする、自己の発達、人間関係の改善、自然環境の認識といった点により強い影響を受けることが推測される。

しかし、参加者への効果を検討した先行研究は、単一の事業を対象としており、同じ指標で複数の

事業を比較・検討した研究はなされていないのが現状である。複数の事業を調査対象とする場合、事業内容、自然環境、指導者などの違いによって参加者に及ぼす影響も異なると考えられるが、この点を考慮しながら、参加者に及ぼす影響について検討することは、フロンティア・アドベンチャー事業や長期キャンプの共通性や特殊性をみる上でも重要であろう。

そこで本研究では、フロンティア・アドベンチャー事業体験が参加者の自己概念と人間関係に及ぼす影響について検討し、フロンティア・アドベンチャーを含む自然生活体験学習の効果的な企画・運営・指導に資することを目的としている。

研究課題としては、1) キャンプ最終日に参加者の事業評価を実施し、事業や自己についての一般的な内容を検討する、2) 事業前、直後及び1ヵ月後の参加者の自己概念を調べ、自己の発達について検討する、3) 事業前後における生活班の雰囲気、班指導者に対するイメージを調査することにより、人間関係の変容について検討する、4) 事業後の参加者の保護者による事業評価を行うことにより、保護者の事業期待について検討する、5) 参加者の自己概念の変容と人間関係や保護者の期待との関連について検討する、6) 1～5の課題に関して、5つの事業体を比較し、参加者に及ぼす影響の差異について検討する、こととした。

研究方法

1. フロンティア・アドベンチャー事業の概要

平成2年度に実施された56のフロンティア・アドベンチャー事業のうち、特色ある活動を展開し、本研究の趣旨に賛同し、調査協力が得られた神奈川県、川崎市、静岡県、山口県、徳島県の5事業を調査対象とした。

1) 神奈川県青少年協会主催「神奈川県青少年アドベンチャーキャンプ」概要

この事業は、平成2年7月14日～15日(1泊2日)の事前研修、8月2日～12日(10泊11日)の本キャンプ、8月26日の反省会で構成され、神奈川県立中央青年の家及び東丹沢周辺で実施された。

参加者は、7～8名からなる男女・学年混合の7班に分けられた。キャンプ・カウンセラーとして、4月～7月までの指導者研修会に参加した学生・教員が各班に2～3名配置され、全体的な運営・指導は県立青年の家職員が当たった。カウ

セラーの平均野外活動指導経験年数は、2.8年(SD=2.48)であった。

この事業の特色は、環境教育を重視した指導方針と中学生以上の参加者が2泊3日のソロを体験することにある。主な活動内容は、イニシャティブ・ゲーム、技術講習(シェルター作り、火器の使用法)、1泊2日の班別登山、1泊2日の学年別登山、ソロ(高学年2泊3日、低学年1泊2日)、野草観察、ロープコース、1泊2日の帰還遠足(班毎にルートと宿泊地を決めて帰還する。)、キャンプファイヤー等である¹³⁾。

2) 川崎市教育委員会主催「フロンティア・アドベンチャー」概要

この事業は、平成2年7月15日の事前研修、8月1日～11日(10泊11日)の本キャンプ、9月30日の事後研修で構成され、川崎市八ヶ岳少年自然の家及びその周辺で実施された。

参加者は、7～8名からなる男女・学年混合の6班に分けられた。キャンプ・カウンセラーとして大学生ボランティアが各班に1～2名配置され、全体的な指導と運営には野外教育が専門の大学教員が1名と市教育委員会職員が当たった。カウンセラーは、野外活動を指導するのがはじめてであった。

この事業の特色は、フロンティア・アドベンチャー事業としては初年度であることである。主な活動内容は、テント設営、環境整備、イニシャティブ・ゲーム、選択活動(炭焼き、土器作り、自然工作、自然観察、食物採取等)、技術講習(読図、コンパスワーク、シェルター作り等)、沢登りと登山(2泊3日)、夕食コンテスト、1日の自由時間、キャンプファイヤー等である。

3) 静岡県教育委員会主催「フロンティア・アドベンチャー事業」の概要

この事業は、平成2年7月14日～15日(1泊2日)の事前研修、8月3日～13日(10泊11日)の本研修で構成され、静岡県立朝霧野外活動センター及びその周辺で実施された。

参加者は、9～10名からなる男女・学年混合の8班に分けられた。キャンプ・カウンセラーとして日本キャンプ協会職員と野外活動関係研究室やクラブに所属する大学院生・大学生が各班に1名配置され、これ以外に、野外教育が専門の大学教員1名及び県立の野外活動施設職員3名が、全体的な指導と運営に当たった。カウンセラーの平均

野外活動指導年数は、4.0年(SD=1.29)であった。

この事業の特色は、初年度から野外教育を専門とする大学教員を中心に質の高い指導者の確保につとめると共に独自の指導者養成を実施していることにある。主な活動内容は、イニシャティブ・ゲーム、地域研究、ハイキング、料理コンテスト、選択活動（マウンテンバイク、ロッククライミング、カヌー、パラグライダー、クラフト等）、1日の自由時間、1泊2日のサバイバルハイクと野宿、キャンプファイヤー等である²⁰⁾。

4) 山口県教育委員会主催「原始に生きる防長っ子キャンプ」概要

この事業は、平成2年7月15日の事前研修、7月25日～8月2日（8泊9日）の本キャンプで構成され、県立秋青年の家及び阿武郡旭村黒ヶ谷周辺で実施された。

参加者は、6名からなる男女別・学年混合の8班に分けられた。キャンプ・カウンセラーとして日本キャンプ協会公認指導員及び教員が各班に1名配置され、これ以外に本事業のためにアメリカの Outward Bound School (OBS) で研修を受けた県社会教育課職員及び日本キャンプ協会公認指導員が全体的な指導と運営にあたり、ハリケーンアイランド OBS の指導者がアドバイザーとして参加した。カウンセラーの平均野外活動指導年数は、3.9年 (SD=4.30) であった。

この事業の特色は、13泊14日間の指導者講習会とアメリカの OBS への研修員の派遣等による指導者養成及び OBS の教育技法を取り入れた事業の展開にある。主な活動内容は、イニシャティブ・ゲーム、テント設営、便所作り、豆腐作り、生活用

具作り、登山、ソロと報告会、キャンプ祭、キャンプ場撤収、マラソン等である²²⁾。

5) 徳島県教育委員会主催「フロンティア・アドベンチャー事業」概要

この事業は、平成2年8月2日～12日（10泊11日）の日程で、県立牟岐少年自然の家及び海部郡牟岐町大島（無人島）で実施された。

参加者は、10名からなる男女・学年混合の6班に分けられた。キャンプ・カウンセラーとして子供会リーダー及び学生ボランティアが各班に3名配置され、全体的な指導・運営は県立少年自然の家及び県社会教育課職員があたった。カウンセラーの平均野外活動指導年数は、2.1年(SD=3.03)であった。

この事業の特色は、活動場所として無人島を使用し、そこでの活動内容は原則として参加者とカウンセラーの話し合いで決定していくことにある。主な活動内容は、技術講習（テント設営、野外炊飯等）、テント設営、便所作り、いかだによる湾内探索、ロッククライミング、班別選択活動（魚釣り、クラフト、火起こし、食用植物の採集、水泳、島内探検等）、火祭、報告会等である²¹⁾。

2. 対 象

平成2年度に実施された5つのフロンティア・アドベンチャー事業(神奈川県、川崎市、静岡県、山口県、徳島県)に参加した小中高校生283名(男子157名、女子126名)及びそれらの事業に子どもを参加させた保護者249名(M=40.1歳, SD=3.59, Min=30歳, Max=52歳)である(表1、2)。

表1 参加者の内訳

主催者	神奈川県		川崎 市		静岡 県		山 口 県		徳 島 県		合 計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
小学5年	7	7	11	5	19	13	8	8	12	6	96
小学6年	5	3	11	9	16	14	8	8	13	14	101
中学1年	8	7	6	1	9	7	5	5	3	6	57
中学2年	4	4	2	1	0	0	2	3	2	4	22
中学3年	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2
高校1年	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	5
小 計	28	22	31	16	44	34	24	24	30	30	283
合 計	50		47		78		48		60		

表2 回答を寄せた保護者の内訳

	神奈川県	川崎市	静岡県	山口県	徳島県	合計
父親	6	9	29	16	20	80
母親	37	31	44	23	31	166
その他	2	1	0	0	0	3
合計	45	41	73	39	51	249

3. 調査内容

1) 参加者による事業評価

キャンプ最終日に、参加者を対象に、質問紙を用いてキャンプや自己についての評価調査を実施した。

2) 自己成長性検査

キャンプ前後における参加者の自己概念の変化を見るために梶田¹²⁾が作成した自己成長性検査の一部を修正して用いた。この検査は、自分自身を自らの力によって自律的継続的に向上発展させようという態度や意欲を測定するもので、31項目、4因子（達成動機、努力主義、自信と自己受容、他者のまなざしの意識）からなる。得点化にあたっては、「全く自分にあてはまる」を5点とし以下順に1点ずつ減少し、「全く自分にあてはまらない」を1点とする5段階評定で実施した。自己成長性検査は、キャンプ前、キャンプ直後及びキャンプ1ヵ月後の計3回実施された。

3) カウンセラー（班指導者）のイメージ調査

キャンプ中参加者に大きな影響を及ぼすカウンセラーに対してどのようなイメージをもっていたのかを見るために、加藤¹⁴⁾が開発した対人イメージ尺度を用いた。この尺度は、21の形容詞対に6

段階で回答するものであり、誠実性因子（8項目）、明朗性因子（5項目）、権威性因子（3項目）、あたたかさ因子（5項目）の4因子で構成されている。この調査は、キャンプ最終日に実施した。

4) 班雰囲気調査

参加者の所属集団への適応を測定するために、根本¹⁸⁾の作成した学級雰囲気をとらえるための評定尺度を、「班雰囲気調査」としてキャンプ前・中・後の計3回実施した。

5) 保護者による事業評価

キャンプの1ヵ月後に、参加者の保護者を対象に、質問紙を用いてフロンティア・アドベンチャー事業後の子どもの変化あるいは期待される効果を中心とした調査を実施した。キャンプ効果に関する質問は、飯田³⁾が母親のキャンプに対する態度調査で用いた質問用紙を使用した。

結果と考察

1. 参加者による事業評価

キャンプ最終日に、参加者に対しフロンティア・アドベンチャー事業の自己評価を実施した（表3）。参加前の事業に対する期待と不安についてみると、各事業とも7割以上の参加者が事業に対し

表3 参加者による事業評価

(%)*

評価項目	神奈川県	川崎市	静岡県	山口県	徳島県	全事業
期待は大きかったか	76.0	75.6	82.1	79.2	81.4	79.3
不安は強かったか	30.0	23.9	43.6	25.0	41.7	34.4
自分の新しい面を発見したか	52.0	43.5	59.0	54.2	40.0	50.5
能力を最大限に発揮できたか	62.0	66.7	51.3	60.4	41.7	55.2
班は楽しい雰囲気だったか	74.0	87.0	79.2	93.8	70.0	80.1
新しい友達をつくれたか	87.8	93.5	92.3	93.8	89.8	91.4
自然について興味を持ったか	80.0	71.7	87.2	89.6	83.1	82.9
キャンプ生活は面白かったか	84.0	95.7	97.4	89.6	67.2	87.1
もう一度参加したいか	72.0	73.9	88.5	64.6	58.6	73.1
他人に参加をすすめたいか	69.4	80.4	89.7	83.3	77.6	81.0

*数値は、5段階評定で「非常に」「かなり」と回答した者の比率

「非常に」もしくは「かなり」の期待感を抱いていた。また事業に対し「非常に」または「かなり」不安であったと回答している者の割合を男女別にみると、男子では川崎市の参加者が20.0%と一番不安が低く、徳島県が43.3%で最も不安が高かった。同様に女子では、神奈川県の参加者が18.2%で最も低く、静岡県が55.9%と全参加者の中で一番高い不安を示していた。これは、事業内容の違いや参加者の性差をはじめ、自主的な参加であったかどうか、事前オリエンテーションの実施の有無とその内容等が影響してくるものと考えられ、今後詳細に検討していく必要がある。

「もう1度事業に参加したいか」の設問に対しては、約6～9割の者が強く希望しており、地域差($\chi^2=24.47$, $df=8$, $p<.01$)がみられた(静岡>川崎>神奈川>山口>徳島)。

また、「他人に参加をすすめるか」では、約7～9割の者が積極的にすすめたいとしていた。この結果は、参加直後は事業に対する満足感はあるものの、疲労や辛い不自由な生活から日常生活へ戻るといった気持ちから、「自分はあまり参加したくないが、他人にはすすめたい」という感想を持ったのだろう。

次に事業に参加して、自分自身、人間関係、自然への興味などに対して変化があったか自己評価をしてもらった。最も高かった評価は、「新しい友だち関係の形成」で各事業ともおよそ9割の者が高く評価していた。逆に評価が低かった項目は、「新しい自己の発見」で4～6割の者があまりそのようなことはなかったと回答している。「キャンプ生活は面白かったか」という項目は、全体として高い評価を受けているが、地域差($\chi^2=36.51$, $df=8$, $p<.001$)がみられた(静岡>川崎>山口>神奈川>徳島)。

いくつかの項目で地域差がみられたことは、活動内容、天候、参加者の班構成(学年差、性差)、指導者等の違いが影響していると思われるので、他の結果と共に詳しく検討する必要がある。

2. 参加者の自己概念について

キャンプ前(Pre)、キャンプ直後(Post 1)、キャンプ1ヵ月後(Post 2)の自己概念得点及び4つの因子得点を全参加者(全体)と男女別参加者ごとに比較したのが表4である。参加者全体では、キャンプ前と比較してキャンプ直後で自己概念得

点、達成動機因子と努力主義因子に有意な向上がみられ、達成動機因子については1ヵ月後も維持されていた。また逆に、他者のまなざし因子ではキャンプ後に有意な減少がみられ、1ヵ月後にもキャンプ前に比べ有意差が認められた。

男女別に自己概念の因子得点の変化をみてみると、男子で特徴的なことは、他者のまなざし因子にキャンプ後有意な減少がみられ、1ヵ月後においても維持されていたことである。また女子では、キャンプ後有意に向上した達成動機因子得点が1ヵ月後も維持され、キャンプ前と比較しても有意差が認められた。

フロンティア・アドベンチャー参加者は、男女とも、キャンプに参加することによって「他の人にはやれないようなことをやりとげたい」などの達成動機と、「何でも手がけたことには最善をつくしたい」などの努力主義を中心とした自己概念が向上すること、特に女子参加者の達成動機に関連する自己概念の向上はキャンプの1ヵ月後も維持することを示している。この結果は、フロンティア・アドベンチャー参加者の自己概念を検討した岩田¹⁰⁾、井村ら⁹⁾の研究や1週間のアドベンチャー・プログラム参加者の自己概念を検討した井村⁹⁾、飯田ら⁴⁾の研究結果とほぼ一致するものであった。

しかしながら、男子参加者にみられた「何かをしようとする時他の人が反対するのではないかと心配する」「他の人をとてもうらやましく思うことがよくある」といった他者のまなざし因子のキャンプ後の有意な減少は、過去の研究結果と異なるものであった。「他者のまなざし」とは、他人の眼に対する過敏性、つまり他人から受け入れられるかどうか、評価されるかどうか、ということが当人の行動原理として機能している程度を示している¹⁰⁾。参加者は、キャンプを体験することにより自信ややる気を高め内面的基準性が増してきたものの、まだそれは確立されたものではなく、その変化に対しての外的評価がどうなのか気になったものと考えられる。つまり、他者のまなざしを過度に意識することは自己の確立において好ましくないが、ある程度意識することによって達成動機などがよりいっそう強いものになることを示しており、青年期前の心理的葛藤のあらわれとも解釈できる。

各事業毎にキャンプ前と最終日の自己概念得点を比較すると、川崎市($t=3.35$, $p<.01$)と静岡

県 ($t=3.59, p<.001$) に有意な自己概念の向上が認められた (表 5)。またキャンプ前と 1 カ月後の比較では、どの事業体においても有意差はみられず、川崎市や静岡県参加者にみられたキャンプ直

後の自己概念の向上は維持されていなかった。

事業体によって参加者の自己概念得点に差がみられたことは、指導者、プログラム、自然環境の違いや参加者自体の発達差、生活環境差などが考

表 4 フロンティア・アドベンチャー事業前後における参加者の自己概念の変容

	N	Pre		Post 1		Post 2		t ₁	t ₂	t ₃
		M	SD	M	SD	M	SD			
〈自己概念得点〉										
全 体	223	105.4	13.74	106.9	14.22	105.9	13.96	-1.97*	1.42	-0.55
男 子	124	107.0	14.39	108.9	15.15	106.2	13.20	-1.60	2.36*	0.75
女 子	99	103.5	12.69	104.6	12.63	105.5	14.91	-1.15	-0.96	-1.93
		t ₄ =1.94*		t ₄ =2.26*		t ₄ =0.39				
〈達成動機因子得点〉										
全 体	223	28.2	4.52	29.5	4.62	28.8	4.78	-4.98***	2.79**	-2.06*
男 子	124	28.5	4.54	29.8	4.80	28.8	4.81	-3.45***	2.86**	-0.52
女 子	99	27.8	4.48	29.0	4.36	28.8	4.76	-3.73***	0.71	-2.92**
		t ₄ =1.24		t ₄ =1.30		t ₄ =-0.09				
〈努力主義因子得点〉										
全 体	223	30.5	4.49	31.9	4.31	30.8	4.32	-4.69***	3.36***	-1.12
男 子	124	30.1	4.83	31.9	4.74	30.5	4.41	-4.41***	3.09**	-1.00
女 子	99	31.1	3.98	31.9	3.73	31.3	4.19	-1.97*	1.44	-0.52
		t ₄ =1.78		t ₄ =0.01		t ₄ =-1.42				
〈自信と自己受容因子得点〉										
全 体	223	23.1	4.95	23.1	4.97	23.3	4.95	0.23	-0.78	-0.54
男 子	124	23.8	5.33	23.8	5.22	23.6	4.83	-0.02	0.60	0.59
女 子	99	22.3	4.30	22.1	4.47	22.9	5.09	0.43	-1.93	-1.55
		t ₄ =2.45*		t ₄ =2.66**		t ₄ =1.05				
〈他者のまなざし因子得点〉										
全 体	223	23.6	5.14	22.5	5.09	23.0	5.13	3.23***	-1.48	1.98*
男 子	124	24.6	5.24	23.3	4.93	23.4	5.29	2.99**	-0.13	2.85**
女 子	99	22.3	4.75	21.6	5.14	22.4	4.90	1.49	-2.19*	-0.32
		t ₄ =3.38***		t ₄ =2.55**		t ₄ =1.34				

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

t_1 =PRE : POST 1 t_2 =POST 1 : POST 2 t_3 =PRE : POST 2 t_4 =男子 : 女子

表 5 フロンティア・アドベンチャー参加者の事業前後における自己概念得点の比較

	N	Pre		Post 1		Post 2		t_1	t_2	t_3
		M	SD	M	SD	M	SD			
神奈川県	43	108.0	13.75	105.4	13.08	107.4	14.72	1.70	-1.47	0.39
川崎市	34	102.4	9.77	107.5	13.15	105.3	13.45	-3.35**	1.08	-1.59
静岡県	67	103.2	16.19	108.4	16.25	104.5	14.20	-3.59***	2.81**	-0.91
山口県	38	107.7	12.92	107.2	14.07	108.8	13.93	0.31	-0.73	-0.67
徳島県	41	106.8	12.40	105.4	13.10	104.1	13.21	0.64	0.78	1.25

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

t_1 =PRE : POST 1 t_2 =POST 1 : POST 2 t_3 =PRE : POST 2

えられる。例えば、プログラム内容でみると、神奈川県、川崎市、静岡県は活動優先型で、選択活動や困難度の高い野宿を伴うバックパッキングを実施しており、徳島県と山口県は生活優先型で、なんら固定施設のないキャンプサイトでの生活原体験を重視している。今回の調査では、神奈川県を除く活動優先型のプログラム参加者に自己概念の向上がみられた。アドベンチャー・プログラムと自己概念との関連について検討した研究結果^{2,7)}によれば、参加者に困難な課題を段階的に解決させ、成功体験を蓄積させていくことにより自己概念の向上がもたらされるとしている。新しい体験やストレス的な活動体験が多い活動優先型に比べ、生活優先型のプログラムの場合、自己の能力を最大限に発揮する機会が少なく、1週間程度の生活原体験では、自己概念の向上に大きな影響を及ぼさないものと推察される。

さらに参加者とプログラムとの関連についてみると、星野¹⁾は、フロンティア・アドベンチャー事業のような長期キャンプを実施する場合、参加者の発達段階を考慮した年齢区分をとる必要性を指摘している。異年齢集団といっても、余りにも年齢幅がありすぎると、誰もが満足できるようなプログラムが組めなくなるため、例えば、小学校4～5年生から中学1年生、あるいは中学1～2年生から高校1年生のような区分が適切であろうと述べている。この星野の区分にしたがって、事業体毎に小学校5年生から中学1年生以外の参加者

の占める割合をみると、静岡県(0.01%)、川崎市(6.4%)、山口県(8.3%)、徳島県(10.0%)、神奈川県(26.0%)の順に増え、参加者の年齢幅の少ない事業体ほど、参加者の自己概念が向上していることが伺え、この結果は、星野の指摘を支持するものと考えられる。

しかしながら参加者の自己の発達を考える場合、新しいストレス的な体験ばかりでなく、種々の体験を自己の発達に結びつけるように援助できる班員や班指導者(カウンセラー)の関わりも重要であり、それらの変数と自己概念との関連を検討する必要がある。

3. 参加者の班指導者(カウンセラー)に対するイメージ

参加者の成長やキャンプに対する満足度などに大きな影響を及ぼすと考えられる班指導者(カウンセラー)をキャンプ中どのようにとらえていたのか、あるいは良好な関係にあったかどうかをみるために、カウンセラーに対するイメージを調査した。その結果、カウンセラーに対するイメージは全般的に好ましく、特に高かったのは明朗性因子に関連する項目で、カウンセラーは「元気で、楽しく、明るい」人というイメージをもたれていた。またカウンセラーに対するイメージの性差と地域差を検討するために2要因分散分析を行った(表6)。性差については、4因子全てにおいて男子よりも女子の方がより好ましく評価しており、

表6 班指導者(カウンセラー)に対するイメージ

		全事業	神奈川	川 崎	静 岡	山 口	徳 島	地域(A)	性(S)	A×S
〈誠実性因子得点〉	全 体	38.57	37.08	38.05	40.24	40.95	36.35	6.12***	7.92**	NS
	男 子	37.69	37.07	37.31	39.80	38.67	34.70			
	女 子	39.65	37.09	39.25	40.81	43.70	37.83			
〈明朗性因子得点〉	全 体	26.13	26.28	25.31	26.63	25.98	26.09	NS	6.29**	4.63***
	男 子	25.65	25.93	25.08	27.13	24.00	25.19			
	女 子	26.71	26.73	25.69	26.00	28.35	26.90			
〈権威性因子得点〉	全 体	12.74	12.56	12.55	12.70	12.64	13.18	NS	7.86**	3.39**
	男 子	12.31	12.46	12.38	12.90	11.04	12.63			
	女 子	13.27	12.68	12.81	12.71	14.55	13.67			
〈あたたかさ因子得点〉	全 体	24.49	23.58	24.10	25.51	25.27	23.70	2.86*	8.19**	NS
	男 子	23.86	23.14	23.54	25.63	23.38	22.70			
	女 子	25.26	24.14	25.00	25.35	27.55	24.60			

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

有意差が認められた。一般に対人イメージは男子に比べ女子の方が好ましく評価する傾向にあり、本研究においてみられた性差もこのことを支持するものであった。また地域差についてみると、誠実性 ($F=6.12$, $df=4$, $p<.001$: 山口>川崎, 神奈川, 徳島; 静岡>神奈川, 徳島) とあたたかさ ($F=2.86$, $df=4$, $p<.05$: 静岡, 山口>徳島, 神奈川) の2因子に有意差が認められた。特に、山口県と静岡県のカウンセラーは、単に「明るくて感じがよい」ばかりでなく、「まじめな、けじめのある」(誠実性因子), 「思いやりのある」(あたたかさ因子) といった点でも高い評価を受けており、親しみの中にも指導者としての一面を参加者に印象づけている。これは、この2県のカウンセラーが、他県に比べ、野外活動の指導経験が豊富な者が多いことによるものと考えられる。

性差や地域差はみられたものの、全体としては好ましいイメージを参加者からもたれており、加藤ら¹⁴⁾の小中高校生を対象に父親, 母親, すてきな教師, 友人等のイメージを調査した結果と比較すると、カウンセラーに対するイメージは、どちらかといえばすてきな教師よりも友人に対するイメージに近いものであった。これは、今回指導にあたった多くのカウンセラーの年齢が20歳前後と若かったことや、1週間以上の協同生活を行ったことが影響しているものと考えられる。

4. 班雰囲気の変化

キャンプの初日, 中日, 及び最終日の班の雰囲気得点について性と地域を要因とした2要因分散分析を行った(表7)。この3回の雰囲気得点それ

ぞれに有意な地域差が認められ(初日, $F=3.00$, $df=4$, $p<.05$: 山口>神奈川, 川崎, 徳島; 静岡>徳島)(中日, $F=3.46$, $df=4$, $p<.01$: 山口, 神奈川, 静岡, 川崎>徳島)(最終日, $F=3.25$, $df=4$, $p<.01$: 静岡, 山口>徳島), また最終日の得点には性差もみられた($F=4.87$, $df=1$, $p<.05$)。しかしながら、各得点間の差(変化量)についてみたところ、有意な地域差も性差もみられなかった。測定した全班雰囲気得点において、山口県の参加者の得点他の県よりも有意に高かったのは、山口県だけが男女別の班編成をしていたことによるものと考えられる。しかしながら変化量に地域差がみられなかったように、男女別や男女混合の班編成が班雰囲気の変化に及ぼす要因とは考えられないであろう。また、雰囲気得点に地域差がみられたのは、班構成における年齢差や男女比などの違い、事前オリエンテーションの実施状況などが影響したものと考えられる。性差については、男子よりも女子の方が好ましい雰囲気であると評価する傾向にあり、対人イメージの傾向と同様のものであると考えられる。

班雰囲気得点の特徴としては、キャンプ初日に比べ中日に有意な低下がみられ($t=2.60$, $df=218$, $p<.01$), その得点が最終日に有意に増加する($t=4.82$, $df=218$, $p<.001$)という変化がみられることである。8日間の無人島アドベンチャーキャンプにおける参加者の人間関係や生活への適応過程を調査した鞍井ら¹⁵⁾によれば、不適応の訴え率は、初日から徐々に増加し、6日目にピークを迎え、その後減少し、最終日に一番低くなったと報告している。キャンプの中日頃は、疲労もたまり人間

表7 キャンプ前・中・後における班雰囲気得点の変化

		全事業	神奈川	川崎	静岡	山口	徳島	地域(A)	性(S)	A×S
キャンプ初日	全体	85.5	85.0	83.4	87.7	91.1	80.4	3.00*	NS	2.44*
	男子	83.9	81.8	80.1	90.7	87.7	76.7			
	女子	87.7	88.8	89.6	83.9	94.9	83.8			
キャンプ中日	全体	82.8	85.4	81.5	85.2	87.4	74.2	3.46**	NS	NS
	男子	81.4	81.6	80.0	87.1	85.0	70.4			
	女子	84.6	89.9	84.6	82.6	90.2	77.8			
キャンプ最終日	全体	87.2	85.3	87.0	91.1	90.8	79.3	3.25**	4.87*	NS
	男子	85.1	83.3	85.3	91.3	86.3	75.1			
	女子	89.9	88.9	90.6	90.8	95.8	84.1			

* $p<.05$ ** $p<.01$

関係等に不満もでてくる時期であることから、雰囲気低下がみられたものと考えられる。しかしながら、長期間の協同生活と様々な活動体験を通じて仲間の大切さや集団内の自己の役割などを理解したことにより、最終日に最もよい雰囲気がなったのであろう。

5. 保護者が期待する事業効果について

キャンプに関する文献を参考にし、キャンプの価値や効果、目標について書かれた具体的な項目を選択、整理し、27項目を設定した。回答と得点化にあたっては、「非常に期待できる」を4点、「かなり期待できる」を3点、「少し期待できる」を2点、「期待できない」を1点とする4段階評定で実施した。

事業効果の期待が高かった項目は、2) 新しい友だちや親しい友人ができる ($M=3.16$, $SD=0.73$)、5) 自然の美しさ、厳しさ、偉大さを理解する ($M=3.45$, $SD=0.64$)、7) 友だちと協力して仕事や活動をする ($M=3.37$, $SD=0.59$)、10) 自然について興味や関心を持つ ($M=3.14$, $SD=0.72$) 等であり、逆に評価の低かった項目は、16)

器用になる ($M=2.12$, $SD=0.79$)、18) 早寝早起きをする ($M=2.21$, $SD=0.96$) 等であった。

母親を対象に同様の調査を行った飯田ら³⁾の研究では、1) 健康的な生活を送る、2) 新しい友人を作る、3) 自然の美しさ、偉大さを理解する、7) 協力して仕事や活動をする、8) 自分のことは自分でする、9) 忍耐強くなる、22) 責任をもって仕事をやりとげるの7項目が高い効果があると評価されていたと報告されており、本研究結果に近いものであった。なお、保護者のキャンプ経験の有無によって効果期待に差がみられるかどうか比較したところ、13) 物を大切にする (未経験者: $M=2.4$, $SD=0.70$, 経験者: $M=2.6$, $SD=0.78$, $t=2.07$, $df=246$, $p<.05$) の1項目にだけ有意差がみられ、他の項目には差がみられなかった。

保護者の事業に対する期待に参加者の性や地域によって違いがみられるかみたところ、27項目中4項目に有意な地域差がみられ、性差はみられなかった(表8)。また回答者が父親と母親の違いによって評定に差がみられるか比較したが、15) 自然を利用した工作に興味を持つ (父親: $M=2.2$,

表8 保護者が期待するフロンティア・アドベンチャー事業効果の比較

	全事業	神奈川	川崎	静岡	山口	徳島	地域(A)	性(S)	A×S
2. 新しい友達や親しい友人ができる	3.16 3.09 2.34	2.98 3.13 2.12	3.00 2.78 2.33	3.22 3.19 2.50	3.10 3.05 2.40	3.39 3.23 2.26	2.63*	NS	3.06*
9. 忍耐力がつく	3.09 3.09 3.08	3.39 3.42 3.33	3.07 2.93 3.38	2.93 2.86 3.03	3.13 3.22 3.05	3.02 3.19 2.84	2.94*	NS	NS
8. 自分のことは自分でする	3.04 3.01 3.07	3.09 3.19 2.94	3.10 2.96 3.38	2.93 2.79 3.13	3.11 3.11 3.10	3.04 3.19 2.88	NS	NS	2.50*
6. 身体が丈夫になる	2.63 2.65 2.60	2.77 2.96 2.50	2.66 2.68 2.62	2.56 2.36 2.83	2.47 2.56 2.40	2.71 2.85 2.56	NS	NS	2.66*
24. 創意工夫をする	2.63 2.65 2.61	2.40 2.48 2.28	2.61 2.68 2.46	2.73 2.70 2.77	2.79 2.74 2.85	2.60 2.68 2.52	2.05*	NS	NT
11. 体力がつく	2.62 2.62 2.63	2.91 3.08 2.67	2.83 2.70 3.08	2.42 2.23 2.68	2.44 2.42 2.45	2.65 2.85 2.44	3.68**	NS	3.25*

* $p<.05$ ** $p<.01$

SD=0.68, 母親: M=2.5, SD=0.75, $t=3.46$, $p<.001$)以外の項目には両群間に有意差はみられなかった。

全体として保護者の評価は, 地域や参加者の性別には関わりなく, 自然の理解と関心, 人間関係の向上, 自己の発達等に関する項目を高く評価し, 基本的生活習慣や身体的な向上についてはあまり期待していない傾向にあるといえる。

6. 自己概念と他の変数との関連

1) 事業への参加決定者と参加者の自己概念との比較

キャンプの効果を論じるとき, キャンプに自分の意志で来たかどうかが重要であることが指摘されている。そこで, 事業への参加を最終的に決定した者を保護者に調査し, 参加者自身が決定した群(自己決定群)と参加者以外(父母, 祖父母など)の者が決定した群(他者決定群)との自己概念得点を比較してみた(表9)。キャンプ前からキャンプ直後への自己概念得点の変化をみたところ, 自己決定群では, 有意な向上がみられたが($t=2.51$, $p<.05$), 他者決定群にはほとんど変化がみられなかった。また, 自己決定群ではその向上がキャンプ1ヵ月後まで維持されていたのに比べ, 他者決定群では, 逆に低下しており, キャンプ直後と1ヵ月後に有意差がみられた($t=2.09$, $p<.05$)。

この結果は, 自主的なキャンプ参加の重要性を支持するものであり, 今後, 事業への参加希望者に対する広報活動や事前オリエンテーション, あるいは保護者の事業に対する理解等に配慮する必要を示すものと考えられる。

2) 班指導者(カウンセラー)に対するイメージと自己概念との関連

参加者の成長に大きく関わる班指導者(カウンセラー)との関係が良好な者ほど, キャンプ後の

自己概念が高まることが予測される。カウンセラーのイメージ調査の得点から上下30%にあたる者をそれぞれ, 好ましいイメージを持っていた者(良好群)とあまり好ましくないイメージを持っていた者(不良群)とし, 両群のキャンプ前後の自己概念を比較した(表10)。

良好群は, キャンプ後達成動機因子と努力主義因子に有意な向上が, 他者のまなざし因子に有意な減少がみられたが, 不良群には有意な変化は認められなかった。また, 良好群の達成動機因子の向上が1ヵ月後まで維持されているのに対し, 不良群の自己概念得点と2因子に有意な低下がみられた。このことから, カウンセラーと良好な関係にあった者の方が, 自己概念が高まるものと考えられる。

3) 班雰囲気と自己概念との比較

キャンプでは小集団生活を基礎にしながら種々の活動を体験し, 自己の改善や人間関係の拡大などが図られるが, 班内の人間関係が良好なほど自己の発達も高まるものと思われる。そこで, キャンプ初日と最終日の班雰囲気得点の差の上下30%をそれぞれ, 班内の雰囲気が低下したと感じている者(低下群: M=-15.6, SD=12.73)と高まったと感じている者(向上群: M=18.6, SD=10.66)とし, 両群の自己概念得点を比較した(表11)。

低下群の自己概念得点は, キャンプ前・後及び1ヵ月後共ほぼ同じ値で変化がみられなかった。また因子別得点をみると, 達成動機因子にキャンプ後有意な向上($t=2.95$, $p<.01$)がみられ, 逆に他者のまなざし因子にはキャンプ後有意な低下($t=2.72$, $p<.01$)が認められた。

向上群では, 自己概念得点($t=2.98$, $p<.01$), 達成動機因子($t=3.54$, $p<.001$), 努力因子($t=4.18$, $p<.001$)それぞれについてキャンプ後に顕著な向上が認められた。

表9 事業への参加決定者の相違と参加者の自己概念との関連

		Pre		Post 1		Post 2		t_1	t_2	t_3
	N	M	SD	M	SD	M	SD			
自己決定群	148	105.1	13.49	107.2	13.57	107.4	14.60	-2.51*	0.41	-2.20*
他者決定群	106	104.9	14.04	105.4	15.16	103.1	12.58	-0.45	2.09*	1.75
		$t_4=0.15$		$t_4=1.00$		$t_4=2.12^*$				

* $p<.05$

t_1 =PRE: POST 1 t_2 =POST: POST 2 t_3 =PRE: POST 2 t_4 =自己決定群: 他者決定群

表10 班指導者（カウンセラー）に対するイメージと自己概念との関連

	N	Pre		Post 1		Post 2		t ₁	t ₂	t ₃
		M	SD	M	SD	M	SD			
〈自己概念得点〉										
不良群	74	106.9	14.05	107.6	15.67	103.9	13.24	-0.45	2.43*	2.23*
良好群	75	105.7	13.71	107.7	14.00	106.8	13.89	-1.50	0.77	-0.80
		t ₄ =0.54		t ₄ =-0.04		t ₄ =-1.30				
〈達成動機因子得点〉										
不良群	74	28.5	4.71	28.8	4.39	27.7	4.52	-0.83	2.40*	1.55
良好群	75	28.4	4.78	30.4	5.25	29.5	4.73	-4.55***	2.16*	-2.43*
		t ₄ =0.13		t ₄ =-1.99*		t ₄ =-2.43*				
〈努力主義因子得点〉										
不良群	74	30.2	4.59	31.1	4.82	29.6	4.97	-1.78	2.45*	1.29
良好群	75	31.2	4.48	32.6	4.35	31.6	3.46	-2.81**	2.06*	-0.88
		t ₄ =-1.31		t ₄ =-1.88		t ₄ =-2.86**				
〈自信と自己受容因子得点〉										
不良群	74	23.9	5.18	23.9	5.41	22.9	4.61	-0.02	2.11*	2.00*
良好群	75	22.8	4.67	22.7	4.76	23.4	5.28	0.10	-1.25	-1.18
		t ₄ =1.33		t ₄ =1.37		t ₄ =-0.69				
〈他者のまなざし因子得点〉										
不良群	74	24.4	5.31	23.7	5.27	23.8	4.82	1.10	-0.20	1.12
良好群	75	23.4	5.45	22.0	5.12	22.3	5.19	2.62*	-0.69	1.95
		t ₄ =1.16		t ₄ =2.05*		t ₄ =1.87				

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

t₁=PRE : POST 1

t₂=POST 1 : POST 2

t₃=PRE : POST 2

t₄=不良群 : 良好群

両群のキャンプ直後の自己概念得点には有意差がみられなかったが、キャンプ前とキャンプ直後の自己概念得点の増減量を比較したところ、両群間に有意差が認められた (t=2.12, p<.05)。

これらの結果は、キャンプ直後においては、班にうまく適応できた者ほど自己概念が高まるが、不適応であった者は他人の眼を意識し過ぎるために十分な自己の発達がなされなかったことを示唆している。しかしながら、このような傾向もキャンプの1ヵ月後にはみられない。

4) 保護者による事業効果の期待と参加者の自己概念との関連

青少年を対象に野外での冒険的活動を実施し、その事業目的を達成するには保護者の理解と協力が重要であることはいうまでもない。フロンティア・アドベンチャー事業においても、この点を考慮し、保護者への事前説明会や報告会の参加を呼びかけている。参加者への効果を考えた場合、参加後の変化を強化し望ましい方向へ伸ばすには、

保護者が重要な役割を持つ。そこで事業の効果を高く評価している保護者（高評価群）と、低く評価している保護者（低評価群）のそれぞれ参加者の自己概念の変化を比較してみた（表12）。

両群のキャンプ前後の自己概念を比較してみると、両群ともに達成動機因子と努力主義因子に有意な向上が認められた。また、キャンプ後と1ヵ月後の得点を比較してみると、高評価群の自己概念が安定しているのに対し、低評価群の努力主義因子はその向上が維持されなかった。以上の結果は、保護者がキャンプの効果を認めていたり期待することにより、キャンプ経験により高められた参加者の自己概念はその後の日常生活に戻っても維持される傾向にあることを示唆している。

結 論

平成2年度に神奈川県、川崎市、静岡県、山口県、徳島県の5つの事業体で実施されたフロンティア・アドベンチャー事業の参加者とその保護者

表11 班雰囲気の変化と参加者の自己概念との関連

	N	Pre		Post 1		Post 2		t ₁	t ₂	t ₃
		M	SD	M	SD	M	SD			
〈自己概念得点〉										
低下群	63	104.8	12.37	104.3	13.30	104.3	13.52	0.28	0.02	0.30
向上群	63	102.8	13.99	106.6	13.72	104.1	15.47	-2.98**	1.85	-0.88
		t ₄ =0.83		t ₄ =-0.94		t ₄ =0.07				
〈達成動機因子得点〉										
低下群	63	27.5	4.10	29.1	4.29	28.2	4.41	-2.95**	1.58	-1.26
向上群	63	28.1	4.56	29.6	4.68	29.0	5.02	-3.54***	1.48	-1.79
		t ₄ =-0.76		t ₄ =-0.69		t ₄ =-1.04				
〈努力主義因子得点〉										
低下群	63	30.2	4.60	30.7	4.11	30.1	4.72	-1.12	1.15	0.18
向上群	63	29.9	4.12	32.0	3.93	30.7	4.18	-4.18***	2.99**	-1.47
		t ₄ =0.33		t ₄ =-1.80		t ₄ =-0.70				
〈自信と自己受容因子得点〉										
低下群	63	23.1	4.67	22.2	5.01	23.1	4.83	1.62	-1.51	0.08
向上群	63	22.1	4.96	23.0	4.38	22.5	4.90	-1.61	0.89	-0.73
		t ₄ =1.22		t ₄ =-0.95		t ₄ =0.70				
〈他者のまなざし因子得点〉										
低下群	63	24.0	4.63	22.4	5.14	23.0	4.64	2.72**	-1.20	1.93
向上群	63	22.8	5.18	22.0	5.02	22.0	5.36	1.30	0.06	1.22
		t ₄ =1.42		t ₄ =0.40		t ₄ =1.14				

** p<.01 *** p<.001

t₁=PRE : POST 1 t₂=POST 1 : POST 2 t₃=PRE : POST 2 t₄=低下群 : 向上群

を対象に、長期間のアドベンチャー・プログラム体験が参加者に及ぼす効果について検討した結果、次の結論を得た。

- 1) ほとんどの参加者が事業に対し満足しているが、事業の違いにより満足度の差がみられる。
- 2) 参加者は、班の指導にあたったカウンセラーに対し「元気で、楽しく、明るい人」という好ましいイメージを持っており、友人に対するイメージに近いものである。
- 3) キャンプ期間中の班内の雰囲気は、中日に低くなるものの、最終日に最も良くなる。また、男女別・男女混合の班編成の違いは、班雰囲気の変化にあまり影響しない。
- 4) 保護者がフロンティア・アドベンチャーの効果として高く評価していることは、事業の違いや参加者の性別にあまり関係なく、自然の理解と関心の高まり、人間関係の向上、自己の発達である。一方、基本的な生活習慣や体力的な面の向上はあまり期待していない。

- 5) 参加者全体でみれば、フロンティア・アドベンチャー事業に参加することにより達成動機と努力主義に関連する自己概念が向上し、特に女子参加者の達成動機に関連する自己概念の向上は1ヵ月後まで継続する。また、参加者の年齢幅が少なく、プログラム主体型の事業内容の方が、参加者の自己概念が向上する。
- 6) 事業への参加を参加者自身で決定した者の方が、事業後の自己概念は向上する。
- 7) キャンプ中カウンセラーに良いイメージを持っていた者は、あまり好ましくないイメージを持っていた者に比べ、事業後の達成動機や努力主義に関連する自己概念が向上する。
- 8) キャンプ前後で班内の雰囲気が高まったと感じている者は、低下したと感じている者に比べ、事業後の自己概念が向上する。
- 9) 保護者がキャンプの効果を認めていたり期待することにより、キャンプ経験により高められた参加者の自己概念はその後の日常生活に

表12 保護者による事業の効果評価の相違と参加者の自己概念との関連

	N	Pre		Post 1		Post 2		t ₁	t ₂	t ₃
		M	SD	M	SD	M	SD			
〈自己概念得点〉										
低評価群	66	101.6	14.59	104.5	13.63	102.9	13.58	-1.90	1.03	-0.98
高評価群	64	107.2	14.21	108.7	14.37	108.2	13.69	-1.08	0.44	-0.62
		t ₄ = -2.23*		t ₄ = -1.73		t ₄ = -2.19*				
〈達成動機因子得点〉										
低評価群	66	27.2	5.17	29.0	4.39	28.3	5.24	-3.31**	1.28	-1.83
高評価群	64	29.3	4.76	30.3	5.22	29.7	4.46	-2.07*	1.62	-0.66
		t ₄ = -2.48*		t ₄ = -1.57		t ₄ = -1.60				
〈努力主義因子得点〉										
低評価群	66	29.7	4.91	31.6	4.23	30.0	4.64	-3.16**	3.04**	-0.75
高評価群	64	31.1	4.14	32.4	3.79	31.9	4.18	-2.75**	0.87	-1.57
		t ₄ = -1.73		t ₄ = -1.20		t ₄ = -2.46*				
〈自信と自己受容因子得点〉										
低評価群	66	22.0	5.42	22.3	4.98	22.6	4.53	-0.50	-0.49	-1.13
高評価群	64	23.4	5.46	23.2	5.59	23.2	5.20	0.27	0.09	0.37
		t ₄ = -1.43		t ₄ = -0.99		t ₄ = -0.71				
〈他者のまなざし因子得点〉										
低評価群	66	22.7	5.31	21.6	4.98	22.0	4.65	1.97	-1.02	1.25
高評価群	64	23.4	5.10	22.8	4.95	23.4	5.10	1.11	-1.27	0.02
		t ₄ = -0.79		t ₄ = -1.33		t ₄ = -1.59				

* p < .05 ** p < .01

t₁ = PRE : POST 1 t₂ = POST 1 : POST 2 t₃ = PRE : POST 2 t₄ = 低評価群 : 高評価群

戻っても維持される傾向にある。

以上のことから、フロンティア・アドベンチャー事業は、今まで行われてきた短期間のキャンプに比べ、冒険的な活動を強調し、期間を延長したことにより、参加者の自己の発達や人間関係の改善により良い影響を及ぼすものと考えられる。しかしながら、参加者の年齢幅やそれに対応したプログラム内容の検討、参加者や保護者への事業内容の周知徹底による、参加者の自主参加と保護者の事業理解の改善などが、事業効果を高めていく要因となることが本研究により示唆されたことから、フロンティア・アドベンチャー事業を運営する際に、十分検討する必要がある。今後は、参加者と自然との関連についての事業評価を行うと共に、フロンティア・アドベンチャー事業に必要とされる指導者の資質とその養成について検討していくことが、事業を発展させていく上で不可欠であろう。

(本研究は、平成元年度文部省科学研究費補助金を得て実施した。)

参 考 文 献

- 1) 星野敏男(1988) : キャンプの企画と運営に関する問題について—フロンティア・アドベンチャー事業との関連から—。明治大学経営学部人文科学論集 36 : 77-90。
- 2) Iida, M. (1975) : Adventure-oriented programs -A review of research. (Ed.) B. van der Smitsen (In) Research Camping and Environmental Education. The Pennsylvania State University, pp. 219-241.
- 3) 飯田稔, 井村仁, 影山義光(1983) : 母親のキャンプ経験とキャンプに対する態度との関連。筑波大学体育科学系紀要 6 : 83-92。
- 4) 飯田稔, 井村仁, 影山義光(1988) : 冒険キャンプ参加児童の不安と自己概念の変容。筑波大学体育科学系紀要 11 : 79-86。
- 5) 井村仁 (1982) : アドベンチャー・プログラム経験

- が中高校生の自己概念と不安に及ぼす影響．筑波大学体育科学系紀要 5：59-70.
- 6) 井村仁 (1985)：短期間のアドベンチャー・プログラム経験が小・中学生の自己概念と不安に及ぼす影響．国際武道大学研究紀要 1：15-25.
 - 7) 井村仁 (1987)：冒険プログラムが自己の発達に及ぼす効果に関する文献的研究．レクリエーション研究 17：21-28.
 - 8) 井村仁，小島哲，諸澄敏之 (1990)：フロンティア・アドベンチャー経験が参加者の自己概念と集団凝集性に及ぼす影響．筑波大学運動学研究 6：77-85.
 - 9) 井村仁，小島哲，寄金義紀，飯田稔，吉田章，橋直隆 (1991)：フロンティア・アドベンチャー事業に関する評価研究—運営・管理についての評価を中心に—．筑波大学体育科学系紀要 14：99-112.
 - 10) 岩田知郎 (1988)：児童生徒の不安と自己概念—ADVENTURE PROGRAM 経験を通して—．岡山大学教育学部大学院修士論文.
 - 11) 梶田叡一 (1975)：青少年の内面的成熟過程に関する検討—自己成長性の発達状況をめぐって．教育の成果分析研究会「青少年の内面的成熟に関する研究」(文部省教育開発委嘱調査研究報告書)，pp. 7-37.
 - 12) 梶田叡一 (1980)：自己意識の心理学．東京大学出版会，東京.
 - 13) かもしかキャンプ報告書編集委員会 (1990)：かもしかキャンプ'90実施報告書．神奈川県県民部青少年室.
 - 14) 加藤隆勝，石川透，田中祐次，落合良行，高木秀明，堀啓造 (1981)：現代青少年の人間関係—親子関係・教師生徒関係・友人関係の特質と生活感情—．伊藤忠記念財団調査研究報告書 6.
 - 15) 鞍井孝，船橋明男 (1989)：無人島キャンプにおける環境適応過程．高知大学学術研究報告 38：35-62.
 - 16) 宮下桂治，木村博人 (1989)：野外教育に関する研究—集団思考による行動が児童生徒の「行動及び性格」に与える影響について—．日本体育学会第40回大会号 B，p. 697.
 - 17) 文部省内生涯学習・社会教育行政研究会 (1989)：生涯学習・社会教育行政必携 (平成 2 年版)．第一法規，pp. 1380-1381.
 - 18) 根本橋夫 (1983)：学級集団の構造と学級雰囲気およびモラルとの関係．教育心理学研究 31 (3)：26-34.
 - 19) Sheif, M., and Sherif, C. (1969) : Social Psychology. Haper and Row, New York.
 - 20) 静岡県教育委員会 (1990)：フロンティア・アドベンチャー事業実施報告書．静岡県教育委員会青少年課.
 - 21) 徳島県教育委員会，徳島県立牟岐少年自然の家 (1991)：冒険！探検！無人島原生活 (平成 2 年度フロンティア・アドベンチャー事業実施報告書)．徳島県教育委員会.
 - 22) 山口県教育庁社会教育課 (1991)：原始に生きる防長っ子キャンプ (平成 2 年度自然生活へのチャレンジ推進事業実施報告書)．山口県教育庁社会教育課.
 - 23) 山本英毅 (1990)：自然生活へのチャレンジ推進事業に関する一考察．日本体育学会第42回大会号 B，p. 612.